

死亡記事に関して、各新聞社は掲載基準のようなものを設けていると思います。大学教授が載るのは、教え子、つまり読者が多いことも理由の1つだと聞いたことがあります。一般に死亡記事をじっくり読む人は少ないと思いますが、世の中にはこの記事を読みしつかりとチェックしている人たちもいます。どんな職業の人か。子どもたちに考えさせると面白いでしょう。議員秘書やデパートの外商担当者、贈答品業者、企業の総務・秘書担当者などが挙げられるのではないのでしょうか。以前、死亡記事で狙いをつけて空き巣に入っただというニュースを読んだことがあります。

- さて、この死亡記事は、世相や国の抱える問題なども映しているといえます。たとえば、
- (ア) 1カ月間に掲載された人の平均年齢や、80歳以上（あるいは90歳以上）の人の割合を出してみましよう。高齢化社会の実態が浮き彫りになるでしょう。
  - (イ) 病名や喪主の続き柄などからも現代社会の一端が垣間見えます。
  - (ウ) 女性の掲載数はまだ少ないようで、女性の社会進出が遅れていることも実感できるはずですよ。
  - (エ) 「葬儀は親族で行った」「通夜、葬儀は近親者で行い、後日、お別れの会を開く」などとあったり、病名が伏せられたりしているケースもよく見かけます。自宅の住所も最近ではあまり掲載されません。個人情報を守りたいという意識が強まっていることがわかります。

死亡記事を使った教室での発表事例を、私は知りません。ぜひ、一度は授業で取り上げてほしいです。

なお、朝日新聞には週に1回程度、「惜別」という欄があり、毎回3人を取り上げて、エピソードや親しかった友人の言葉などを交え、故人の業績や人柄を読み物風にして載せています。年末には「プレーバック」という特集があり、1年間のニュースを数ページにまとめていて、その中に「亡くなった方々」が掲載されています。翌年の「主な日程」もあります。この紙面はぜひ保存しておいてください。

(鈴木伸男 全国新聞教育研究協議会顧問)